6　結　語

興福寺南大門の発掘調査では、次の成果を得た。

造営前の地形　興福寺南大門は、中心伽藍が占地する丘陵の南端部に位置し、南方へと開く谷を埋めたうえで基壇を築いている。この谷は中金堂院の東面回廊および中門の発掘調査で確認してきたものと一連であり、興福寺の造営にのぞんでこの谷を埋めるなど、大規模な整地をおこなったことが判明した。

基壇と建物　南大門の基壇は東西30.8m、南北16.6mで、これよりわずかに小さい規模の掘込地業をおこない、版築工法で築いている。版築層は最大で厚さ約2.6mで、層相から４つの単位に分かれる。礎石（花崗岩）は版築の途中で据え付けており、創建時のものである。また、基壇縁付近の断割調査で確認した複数基の土坑（SK9397 ～ SK9404）は一連の柱穴とみられ、造営時の足場穴と考えた。

基壇上の建物SB9360は桁行４間×梁行５間で、東西23.1m（78.0尺）、南北8.9m（30.0尺）の規模をもつ。中央３間分は門の通路にあたり、その幅は14.2m（48.0尺）である。

鎮壇具埋納遺構の発見　基壇中央部で発見した創建時の鎮壇具埋納遺構SX9361は、興福寺の地鎮具・鎮壇具に新たな例を加えただけでなく、寺院の門における鎮壇の一例として特筆すべきものである。判明した納入順序でいえば、まずガラス小玉13点を、次いで銭貨（和同開珎）５枚を須恵器広口壷の中に納めている。銭貨には絹織物の断片が付着し、銭貨を包んでいた可能性がある。銭貨の次には茶褐色の有機物（植物質繊維やナツメ種実など）を納めるが、その品目についてはさらなる検討を要する。最後には海産魚類（フサカサゴ科）の頭部のみを茶褐色有機物の上に載せる。鎮壇具容器への魚類納入はかつて確認例がないが、古代寺院における地鎮・鎮壇の行為が、単に仏教的な儀軌によってのみ律せられたわけではないことがわかる。

金剛力士の基礎　金剛力士の基礎SX9362・SX9364は、被熱した転用石材（凝灰岩Ｂ）を台石とし、凝灰岩Ｂの基壇外装を撤去して以後の設置とみられる。SX9364の台石間に詰まった暗褐色土から採取した木炭の^{14}C年代は、11世紀前半と12世紀後半～ 13世紀初めとを示し、後者が第４次再建（1187）に近い。このことを重視し、SX9364は第５次焼失（1277）時にはすでに存在し、第４次再建以前の設置と考えた。なお、『玉葉』建久２年９月８日条は、第４次再建時における南大門の金剛力士造像について次の事実を伝える。南大門の金剛力士像は、当初院派仏師・院実があたることになっていたが、寺家側は奈良仏師・康慶を強く推挙したという。その顛末は定かでないが、いずれにせよ12世紀末に造立の力士像は木彫であったといえよう。

基壇外装の変遷　南大門の基壇外装には、確認しえたもので凝灰岩Ｂと花崗岩との２種類の石材を用いており、前者の方が古い。凝灰岩Ｂは南大門の使用石材では現存最古のもので、これを支えるＩ期据付土は夾雑物を一切含まない。また、南階段SX9405の積土は凝灰岩Ｂの岩片を多く含んでいる。南階段には大規模な改修を受けた形跡がなく、凝灰岩Ｂの使用が奈良創建時まで遡る可能性を否定できない。なお中金堂の発掘調査では、凝灰岩Ｂによる基壇外装の後補（当初材は凝灰岩Ａ）を確認しており、凝灰岩Ｂの使用が創建時まで遡ることはない。花崗岩への改修は、上にみた金剛力士基礎SX9364の台石が凝灰岩Ｂの転用材であることから、第４次再建（1187）時と考えた。ただし、第３次再建時には讃岐国に石材を運ばせるよう下知したとの記録（『後二条師通記』康和元年３月３日条）もあり、凝灰岩Ｂと花崗岩との間に、まったく別の石材を用いる時期があったことも十分考えられる。　（森川 実）